

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：13902
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2017～2021
 課題番号：17K04412
 研究課題名(和文) 小中学生の対人葛藤解決力発達支援モデルの開発 友人関係における志向性に注目して

研究課題名(英文) Establishment of a Model to Support the Development of Interpersonal Conflict Resolution Skills in Elementary and Junior High Schools : Focusing on Intentionality in Friendships

研究代表者
 鈴木 伸子 (SUZUKI, NOBUKO)
 愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：70387497
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、小中学生にとって重要な対人葛藤場面であると考えられる「学級内のからかい場面」に焦点をあて、高学年児童を対象にからかい場面における第三者の行動(仲裁・観衆的・傍観的行動)に影響を及ぼす要因について検討することを目的とした。その結果、児童が抱く場面に対する不快感情は、仲裁行動を促進し観衆的行動や傍観的行動を抑制させることなどが明らかになった。また、児童のクラスメイトの行動推測が児童の行動に及ぼす影響については、仲裁行動と観衆的行動で認められ、からかい場面における観衆的行動を抑制し仲裁行動を促進するには、児童を取り巻く周囲の他者からの影響も考慮する必要があると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
 からかいは親密な関係において社会的絆を深める関係促進効果があるとされる一方で、他者に向けられた問題行動、攻撃行動としても位置づけられている。本研究では、小中学生にとって重要な対人葛藤場面であると考えられる「学級内のからかい場面」に焦点をあて、高学年児童を対象に場面における第三者の行動に影響を及ぼす要因について、場面に対する不快感情、からかいに対する肯定的態度、被信頼・受容感、他者の行動推測との関連から検討した。その結果、場面に対する不快感情、および他者の行動推測が特に重要であることが明らかになり、今後の小中学生の対人葛藤解決力発達支援において有効な知見を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on classroom teasing, which is a common source of interpersonal conflict among elementary and junior high school students. The aim was to examine factors influencing behaviors of third-parties (such as mediators, spectators, and indifferent bystanders) when higher-grade school children were teased in classrooms. The results revealed that the discomfort children felt when they observed teasing encouraged their behaviors as mediators and restrained behaviors that make them act as spectators and indifferent bystanders. It was also observed that children's prediction of how their classmates will behave affects whether they act as mediators or spectators. Therefore, it seems necessary to consider the influence of others around children to curb their behavior as a spectator and encourage their behavior as a mediator when teasing occurs.

研究分野：臨床心理学

キーワード：対人葛藤解決方略 友人関係における志向性 学級内のからかい場面

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

学校生活では、深刻な問題に至らないまでも、些細な欲求の衝突や意見の相違などの対人葛藤は日常的に生じ、その場における児童生徒の対処は多様である。一方、このような場面における対処、すなわち、対人葛藤解決方略の個人差と仲間からの評価や社会的適応には関連があることが指摘されてきた。特に、他者を準拠点として自分の行動を決めることが多い日本の子どもには、仲間との間に生じた葛藤にどう対処するかが、児童生徒の心の健康や学校適応に影響を及ぼすことが考えられる。学校生活や友人関係を巡る悩みを抱えやすいと考えられるわが国の子どもの対人葛藤解決力発達支援を考えるにあたっては、友人関係を中核に据えた検討が望まれる。従来、対人葛藤解決方略と友人関係における志向性との関連については、主として大学生を対象にした研究がみられる一方で、小中学生を対象とした検討は十分ではない。研究開始当初、研究代表者は、子どもの学校生活における対人葛藤解決方略と心の健康に関する一連の研究を継続中であった。本研究はそれらを発展・深化させること、すなわち、小中学生の対人葛藤解決力について、以下の複数のアプローチにより現状解明を行い、発達支援のためのモデル開発を行うことを目的に開始した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、小中学生の対人葛藤解決力について、学級内のからかい場面における第三者の行動に影響を及ぼす要因を明らかにすること、教育支援センター通級児童生徒の他者の意図が曖昧な場面における意図解釈・内言・反応行動の特徴を検討すること、日本における外国人児童の対人葛藤解決方略の特徴を検討することを通して、発達支援のためのモデルを開発することである。

3. 研究の方法

(1) 学級内のからかい場面における第三者の行動に関する研究

2校の公立小学校に在籍する4~6年生計324名に協力を得て、学級単位で質問紙調査を行った。先行研究(石田・吉田, 2016; 吉田・石田, 2016)において作成された学級内の授業中のからかい場面を提示し、場面を見ている第三者の立場から、場面に対する不快感情、場面における行動(仲裁行動、観衆的行動、傍観的行動)からかきに対する肯定的態度、学級における被信頼・受容感、他者の行動推測を尋ねた。

(2) 教育支援センター通級児童生徒の他者の意図が曖昧な場面における意図解釈・内言・反応行動に関する研究

公立小中学校各1校、4つの教育支援センターの小学5年生~中学3年生計201名の協力を得て、質問紙調査を行った。小中学校では学級単位で、教育支援センターでは通級単位で集団実施した。支援群の一部は指導者の判断にもとづき個人実施した。他者の意図が曖昧な場面については、戸田・渡辺(2012)を参考に作成した「挨拶に返事がない場面」を提示し、相手の意図の解釈、内言、その場の反応行動およびその後の反応行動を尋ね、生活の場の適応感、自尊感情との関連を検討した。

(3) 日本における外国人児童の対人葛藤解決方略に関する研究

研究開始当初進行中であった日本における外国人児童のウェルビーイングに関する国内共同研究(JSPS16K04352, 研究協力者)において、外国人児童の対人葛藤解決方略の特徴を日本語能力との関連から検討した。5校の公立小学校に在籍する4~6年生計1,096名(日本人809名, 外国人287名)の協力を得て、質問紙調査を行った。対人交渉方略モデル(Interspersonal negotiation strategies: INS)(Yeates & Selman, 1989)および山岸(1998)を参考に作成した対人葛藤場面における葛藤解決方略に関する質問票を用いた。

4. 研究成果

(1) 学級内のからかい場面における第三者の行動に関する研究

小中学生にとって重要な対人葛藤場面であると考えられる「学級内のからかい場面」に焦点をあて、高学年児童を対象に場面における第三者の行動(仲裁・観衆的・傍観的行動)に影響を及ぼす要因について検討した。主な結果として、児童が場面を不快に捉えることは、からかきの抑止につながることで、からかきの否定的側面に目を向けることで仲裁行動の促進、観衆的行動の抑制につながることで、他者の行動推測が児童の行動に及ぼす影響については、仲裁行動と観衆的行動で認められ、観衆的行動を抑制し仲裁行動を促進するには、児童を取り巻く周囲の他者にも目を向ける必要があることが明らかになった。

(2) 教育支援センター通級児童生徒の他者の意図が曖昧な場面における意図解釈・内言・反応行動に関する研究

対人関係に対する過敏さが増す思春期前後は、曖昧な攻撃に対する解釈と対処行動が、児童生

徒の学校適応や心の健康に影響を及ぼす可能性が高まる時期である(戸田・渡辺, 2012 他)。本研究では、登校している児童生徒(登校群)との比較を通して、教育支援センター通級児童生徒(支援群)の他者の意図が曖昧な場面における意図解釈、内言、反応行動の特徴を検討した。その結果、登校群、支援群ともに、場面における敵意的解釈が生活の場の適応感と負の相関関係にあることが示された。また支援群では、こうした意図解釈のあり様が場の適応感のみならず自尊感情の側面にも関連していることがうかがえた。支援群の自尊感情は登校群より低く、先行研究を支持する結果となった。一方、場の充実感は支援群が登校群より高い傾向にあり、彼らの「心の居場所」として、教育支援センターの役割の重要性が改めて確認された。本結果から、支援群の適応感や自尊感情に働きかける上で、他者の意図が曖昧な場面における意図解釈への着目が、有効な手立ての一つになり得ると考えられた。さらに、意図解釈パターンに着目した検討を行ったところ、登校群、支援群ともに、意図解釈の特徴によって、生活の場の適応感や自尊感情に違いが示された。

(3) 日本における外国人児童の対人葛藤解決方略に関する研究

これまで日本における外国人児童の対人葛藤解決方略についての報告は皆無であった。今回は日本語能力水準との関連から検討した。主な結果として、外国人児童は日本語能力水準の程度にかかわらず、総じて日本人児童よりも多様な方略を使用しやすいことが明らかになり、彼らが葛藤場面での安定した対処方略の獲得に関する課題を抱え、特に葛藤相手を「説得」することの難しさを感じていることが示唆された。

また、児童らの在籍校の特性(学校特性)も踏まえた検討を行ったところ、総じて、男子では、複数の方略使用において学校特性と日本語能力の影響が認められ、特に外国人児童が全児童の過半数を占める小学校の日本語能力水準が高い外国人児童にはあらゆる方略を使用した葛藤解決重視の傾向が示された。女子では、複数の方略使用において学校特性の影響が顕著であった。しかしながら、日本語能力水準が低い外国人児童には、学校特性にかかわらず児童間の葛藤解決に教師を頼りにしている様子がうかがえた。

<引用文献>

石田靖彦・吉田紗也(2016). からかい・からかわれ経験とからかいに対する態度がからかい場面の感情推測に及ぼす影響 小学校高学年を対象として 日本教育心理学会第58回総会発表論文集.

戸田まり・渡辺恭子(2012). あいまいな攻撃に対する解釈と対処行動の発達: 社会的情報処理の視点から 発達心理学研究, 23, 214-223.

山岸明子(1998)小・中学生における対人交渉方略の発達及び適応感との関連 性差を中心に 教育心理学研究, 46, 163-172.

Yeates, K. O., & Selman, R. L. (1989) Social competence in the schools: Toward an integrative developmental model for intervention. *Developmental Review*, 9, 64-100.

吉田紗也・石田靖彦(2016). 社会的スキルと学級集団内地位がからかい-からかわれ場面の認知に及ぼす影響 小学校高学年を対象として 日本学校心理学会第18回名古屋大会発表論文集.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 鈴木伸子・坪井裕子・松本真理子・森田美弥子	4. 巻 70
2. 論文標題 小学生における対人葛藤解決方略の特徴 - 高学年児童を対象としたインタビュー調査による検討 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛知教育大学研究報告. 教育科学編	6. 最初と最後の頁 85-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 野村あすか・松本真理子・鈴木伸子・稲垣美穂・坪井裕子・森田美弥子	4. 巻 22(1)
2. 論文標題 日本における外国人児童のウェルビーイングに関する研究 日本語能力との関連から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学校メンタルヘルス	6. 最初と最後の頁 60-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 鈴木伸子・五十嵐哲也・坪井裕子・松本真理子・森田美弥子	4. 巻 35
2. 論文標題 小学生における学級内の対人葛藤解決方略と承認・被侵害感との関連	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 心理臨床学研究	6. 最初と最後の頁 290-296
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 鈴木伸子・松本真理子・坪井裕子・野村あすか・森田美弥子	4. 巻 7
2. 論文標題 日本の小中学生の対人葛藤解決方略に関する QOL - フィンランドの小中学生との比較から -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要	6. 最初と最後の頁 19-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鈴木伸子・松本真理子・坪井裕子・野村あすか・森田美弥子
2. 発表標題 日本とフィンランドの小中学生の対人葛藤解決方略の特徴とQOL
3. 学会等名 日本心理臨床学会第38回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木伸子・小田菜摘
2. 発表標題 教育支援センター通級児童生徒の他者の意図が曖昧な場面における意図解釈，内言，反応行動の特徴（1） - 生活の場の適応感及び自尊感情との関連 -
3. 学会等名 第40回国際学校心理学会（ISPA）東京大会・日本語プログラム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小田菜摘・鈴木伸子
2. 発表標題 教育支援センター通級児童生徒の他者の意図が曖昧な場面における意図解釈，内言，反応行動の特徴（2） 意図解釈パターンの違いに着目して
3. 学会等名 第40回国際学校心理学会（ISPA）東京大会・日本語プログラム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松本真理子・坪井裕子・鈴木伸子・野村あすか・垣内圭子・大矢優花・二宮有輝・稲垣美絢・森田美弥子
2. 発表標題 日本における外国人児童のウェルビーイング(1) 背景としての家庭環境
3. 学会等名 日本学校心理学会 第19回つくば大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 野村あすか・松本真理子・坪井裕子・鈴木伸子・垣内圭子・大矢優花・二宮有輝・稲垣美絢・森田美弥子
2. 発表標題 日本における外国人児童のウェルビーイング(2) 日本語能力に着目したQOL
3. 学会等名 日本学校心理学会 第19回つくば大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 稲垣美絢・垣内圭子・松本真理子・坪井裕子・鈴木伸子・野村あすか・大矢優花・二宮有輝・森田美弥子
2. 発表標題 日本における外国人児童のウェルビーイング(3) 学校特性および日本語能力に着目した動的学校画
3. 学会等名 日本学校心理学会 第19回つくば大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鈴木伸子・松本真理子・坪井裕子・野村あすか・垣内圭子・大矢優花・二宮有輝・稲垣美絢・森田美弥子
2. 発表標題 日本における外国人児童のウェルビーイング(4) 学校特性および日本語能力に着目した対人葛藤解決方略
3. 学会等名 日本学校心理学会 第19回つくば大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鈴木伸子・石田靖彦
2. 発表標題 学級内のからかい場面における第三者の行動に影響を及ぼす要因の検討(1) - 不快感情, からかいに対する肯定的態度, 被信頼・受容感との関連から -
3. 学会等名 日本学校心理学会第23回福岡大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石田靖彦・鈴木伸子
2. 発表標題 学級内のからかい場面における第三者の行動に影響を及ぼす要因の検討(2) - 不快感情, 他者の行動推測との関連から -
3. 学会等名 日本学校心理学会第23回福岡大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石田 靖彦 (ISHIDA YASUHIKO) (10314064)	愛知教育大学・教育学部・准教授 (13902)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------